

黙示録1章4－8節 「神からの挨拶」

1A 三位一体の神 4－5a

1B 七つの教会 4a

2B 永遠の神と御霊 4b

3B 御子の三つの働き 5

2A イエス・キリストの御業 5b－6

1B 十字架の愛 5b

2B 祭司の王国 6

3A 主の再臨 7－8

1B 諸国とユダヤ人の嘆き 7

2B 万物の支配者 8

本文

黙示録1章を開いてください。私たちは今晚、1章4節から8節までを見ていきたいと思います。私たちが学び始めたのは、「イエス・キリストの黙示」であります。前回学びましたように、これは、「イエス・キリストの現われ」であり、この方の栄光が現れることがこの書物の目的です。そして、その現われは、主の地上への再臨をもって最高点に達します。私たちは前回、1節から3節までにおいて、ヨハネがこの預言を書き記すことの前置きを書き記していました。そして4節から、挨拶が始まります。

1A 三位一体の神 4－5a

4 ヨハネから、アジアにある七つの教会へ。常にいまし、昔いまし、後に来られる方から、また、その御座の前におられる七つの御霊から、5a また、忠実な証人、死者の中から最初によみがえられた方、地上の王たちの支配者であるイエス・キリストから、恵みと平安が、あなたがたにあるように。

1B 七つの教会 4a

ヨハネが、黙示録を書いたのは、ここにあるように、「アジアにある七つの教会」に対するものでした。アジアとは小アジアのこと、今のトルコです。そこにある教会、「1:11 エペソ、スミルナ、ペルガモ、テアテラ、サルデス、フィラデルフィヤ、ラオデキヤ」にある教会に対するものです。

時は、この前話しましたように、紀元後 95 年辺りと言われています。教会が紀元 30 年辺りに聖霊が降ることによって始まって、既に 60 年以上経っていました。イエス様の御伴をして、その方の十字架と復活を目撃した弟子たちは、残りがヨハネのみとなりました。他の使徒たちは皆、殉教したのです。そして教会は、ローマ帝国による第二波の迫害がドミティアヌスによって襲っていました。

た。このように、直接の目撃者がヨハネ以外にはいなくなっており、しかも教会に対する迫害が激しくなっている時のことです。そして、2 章と 3 章を読みますと分かりますように、教会には内部にもいろいろな問題が起こっていました。それらは偏に、「イエス・キリストが生きておられることが、証しされていない。」ということに尽きたでしょう。したがって、主のお姿が現われるという幻は彼らにとって死活的だったのです。そして、私たちキリスト者にとって死活的です。私たちが聖霊によって、イエス・キリストの姿をはっきりと見えていない、けれども、外部にはキリスト者に対する圧迫が強くなっています。したがって、ヨハネがこの世を去る前に主ご自身が彼に最後の預言の啓示を、父なる神にあって与えてくださったのです。



その受け手である、七つの教会であります。地図を見てください。パトモス島に、ヨハネは流刑されていました。そこで主から啓示を受けたのですが、彼はドミティアヌスの死後、新しい皇帝になった時に釈放されて、おそらくエペソに戻ったものと思われます。そこで彼は、自分の聞いたこと、見たものを書き記したのでしょう。あるいはパトモス島で書き記したものを、エペソでその巻き物を回覧するように命じたのかもしれません。教会ですが、エペソからスミルナ、スミルナからペルガモ、テアテラ、サルデス、フィラデルフィア、そしてラオデキヤの順番に、イエス様が 2 章と 3 章で御使いによって言葉を与えられます。おそらく、黙示録が回されたのも、この順番だったのでしょう。巻き物は写本にするのはとても時間がかかりますから、写本をしていても大した数ではなかったかもしれません。ですから、かつて他の手紙でもそうであったように、回覧していたと考えます。これら

¹ [http://meigata-bokushin.secret.jp/index.php?%E8%8A%B1%E5%AB%81%E3%81%AA%E3%82%8B%E6%95%99%E4%BC%9A%E3%82%92%E3%81%8D%E3%82%88%E3%82%81%E6%95%B4%E3%81%88%E3%82%8B%E8%8A%B1%E5%A9%BF%E3%82%AD%E3%83%AA%E3%82%B9%E3%83%88%E3%81%8B%E3%82%89%E3%81%AE%E6%89%8B%E7%B4%99\(2%2C%203%E7%AB%A0\)](http://meigata-bokushin.secret.jp/index.php?%E8%8A%B1%E5%AB%81%E3%81%AA%E3%82%8B%E6%95%99%E4%BC%9A%E3%82%92%E3%81%8D%E3%82%88%E3%82%81%E6%95%B4%E3%81%88%E3%82%8B%E8%8A%B1%E5%A9%BF%E3%82%AD%E3%83%AA%E3%82%B9%E3%83%88%E3%81%8B%E3%82%89%E3%81%AE%E6%89%8B%E7%B4%99(2%2C%203%E7%AB%A0))

七つの教会の町は、いずれもローマにおいて非常に大きい都市でありました。そして、それぞれがローマの街路によって太い環状線がありました。地図で見ると、三角形になっています。

そして、これら七つの教会に対してどうして、語られたのか？ということですが、黙示録は、他の聖書の書物以上に、「七」という数字が多発します。今読んだように、「七つの御霊」とあります。そして、七つの教会には七人の御使いが遣わされています。5 章には、七本の角と七つの目を持った小羊が出てきます。6 章以降には巻き物の七つの封印が解かれます。それから七つのラッパの災いがあり、そして七つの鉢の災いがあります。10 章には七つの雷が出て来て、また悪の勢力として七つの頭と七つの冠を持っている赤い竜が出てきます(12:3)。このように、七が数多く出て来ており、そして「七つの教会」の前には定冠詞、英語の the が付いているそうです。そして小アジアには、コロサイにある教会など、他にも建て上げられた大きな教会がありました。ですから、ここにある「七」は象徴的なものなのです。2 章と 3 章において、七つの教会に語られるイエス様は、「耳のある者は御霊が諸教会に言われることを聞きなさい。(3:6 等)」とあり、その地域教会だけに語られているのではなく、教会全体に対して語られていることが分かります。

ところで、七という数字が、聖書全体で使われており、「完全」という意味合いとして一貫して使われています。特に七の数字は、天地創造の七日間から始まっており、神は七日目を聖別して祝福されました。そして、カインの話にも、ノアの話にも、ヤコブの話にも、ひっきりなしに「七」が登場します。神が完成された七日目という意味合いをもって、この世をお始めになりました。そして黙示録においては、神が七という数字をもって、この世を終わらせ、救いを完成して下さるということが出来ます。そして、レビ記においては祭りが七つあり、ヨシュアがエリコを攻略するときも、七人の祭司が七本のラッパを持って、七日間エリコを回り、七日目に七度ラッパを吹き鳴らしました。七つの祭りが、キリストの初臨と再臨の働きを示して、神の贖いのご計画全体を示していると言え、ヨシュアのエリコ攻略は、神が世界に災いを下す黙示録の姿を予め表しているものであります。

ですから、イエス様は、ヨハネに対して「この書をもって、七つの教会、すなわち世界の教会史全体に渡る諸教会に対する言葉としなさい。」と命じられているものと思われます。私たちが今も七つの教会の中を生きており、その延長の中に生きているのだという意識を持つことは大切です。

2B 永遠の神と御霊 4b

そして次が、三位一体の神からの挨拶になっていることに気づいてください。「常にいまし、昔いまし、後に来られる方」が父なる神、「七つの御霊」が聖霊、そして、「イエス・キリスト」です。初めに、「常にいまし、昔いまし、後に来られる方」であります。これは神の永遠性を示しています。神はいつもいてくださる方です。時間を超えておられます。それだけでなく、昔おられます。ですから、全ての事の始まりには主がおられます。神がおられなかった時はなく、天地創造の前から永遠の昔におられます。そして「後に来られる」つまり、最後の審判をもって臨まれる方です。

思い出してください、主なる神がモーセに現れた時に、「わたしは、『わたしはある』という者である。(出エジプト 3:14)」と言われました。そして、旧約の各時代に、「主は備える者」「主は旗」「主は癒す者」「主は平安」「主は正義」「主はここにいる。」というように、ご自分がそこに現におられることを現わされました。そして、イエス様は、「わたしは、命のパンです。」「わたしは、命です、甦ります。」「わたしは世の光です。」「わたしは、アブラハムがいた前から、ある。」と言われ、ゲッセマネの園においても、「わたしは、ある」と言われて、捕えに来た者たちが後ろに倒れました。父なる神が、「わたしはある」と言われ、子なるキリストが父を現わしたのです。

このように、神が私たちの生活に関わってくださり、必要となってくさるのですが、その同じ神が永遠であることを知ることはとても大切です。私たちは、時代の中に生きています。当時の教会は、ローマの迫害の中に生きていました。その困難に耐える力は、そのような時代を超えたところにおられる神、永遠の神を信じていたからです。だから、私たちは教会が誕生してから二千年も経っているのに、それでも持ちこたえています。聖書が書かれたのが二千年前なのに、今のことを神は語ってくださっていることを知っています。

そして、「また、その御座の前におられる七つの御霊から」ということですが、七つの教会と同じく、この「七」は完全を示すものです。「七つの御霊」については、ゼカリヤ書の中に預言されています。主が、帰還したユダヤ人に勇気を与えるために、大祭司ヨシュアと総督ゼルバベルそれぞれに預言しました。ヨシュアについては、彼の前に「3:8-9 わたしのしもべ、一つの若枝を来させる。」「見よ、わたしがヨシュアの前に置いた石。その一つの石の上に七つの目があり、見よ、わたしはそれに彫り物を刻む。」と言っています。偉大な大祭司キリストの来られる預言ですが、その石には七つの目がある、と預言しています。それで次の章で、ゼルバベルに対する預言として、オリーブの二本の木の前にある七つの灯皿のある燭台の幻を主は見せました。そして、「4:6『権力によらず、能力によらず、わたしの霊によって。』と万軍の主は仰せられる。」と言われるのです。このオリーブの木からの油は、主の御霊を示していました。そしてゼルバベルに対して語られます。「10 これらは、ゼルバベルの手にある下げ振りを見て喜ぼう。これらの七つは、全地を行き巡る主の目である。」七つの灯皿は御霊のことを示しており、その中は全地を行き巡る目であり、先のヨシュアに対する預言、「石の上にある七つの目」であります。そして黙示録 5 章 6 節を読みます。「さらに私は、御座…そこには、四つの生き物がいる。…と、長老たちとの間に、ほふられたと見える小羊が立っているのを見た。これに七つの角と七つの目があった。その目は、全世界に遣わされた神の七つの御霊である。」このようにつながっているのです。前回の学びで、黙示録の象徴はそれほど難しいものではない、そして私的解釈を施してはならないという理由はここにあります。旧約聖書の預言がイエス・キリストを証しているということなのです。

そして、七つの御霊から教会に対しての挨拶ということですが、御霊がこれから全教会に対して、七つの目のようにして、世界で起こっていることをくまなく見ておられる御霊が語られるのです。教会に対して、「御霊が諸教会に言われることを聞きなさい。」と言われていました。

そして多くの人が、イザヤ書 11 章のメシヤ預言についても取り上げます。これも大切でしょう。「11:1-2 エッサイの根株から新芽が生え、その根から若枝が出て実を結ぶ。その上に、主の霊がとどまる。それは知恵と悟りの霊、はかりごとと能力の霊、主を知る知識と主を恐れる霊である。」エッサイの若枝、ナザレからのイエスがダビデの子であります、この方に聖霊が降りました。バプテスマを受けられる時に聖霊が降りましたが、その宣教の働きにおいて聖霊は、七つの特徴をもってイエス様に臨まれます。主なる神の霊、知恵の霊、悟りの霊、はかりごとの霊、能力の霊、主を知る知識の霊、そして主を恐れる霊です。

3B 御子の三つの働き 5

そしてイエス・キリストですが、「また、忠実な証人、死者の中から最初によみがえられた方、地上の王たちの支配者であるイエス・キリストから」と三つの働きがありますね。イエス様が、初めに「忠実な証人」であられました。前回もお話しましたが、イエス様は父なる神を忠実に証しされました。父なる神が語られることを語り、御父がされることのみを行ない、父なる神と一つであるし、一つとなって動いておられました。イエス様は、十字架につけられる直前に、ピリポから、「主よ。私たちに父を見せてください。そうすれば満足します。(ヨハネ 14:8)」と頼まれました。主は答えられました。「ピリポ。こんなに長い間あなたがたといっしょにいるのに、あなたはわたしを知らなかったのですか。わたしを見た者は、父を見たのです。」イエスさまを見れば父を見る、というぐらい、イエスさまは、父なる神を正確に証しされていたのです。

そして主は昇天される前に弟子たちに約束されました。「使徒 1:8 しかし、聖霊があなたがたの上に臨まれるとき、あなたがたは力を受けます。そして、エルサレム、ユダヤとサマリヤの全土、および地の果てにまで、わたしの証人となります。」私たちは、イエスご自身を証しするように召されています。聖霊の力によって、証しするように召されているのです。

それから、黙示録には「証人」であるとか、「証し」という言葉が多く出てきます。そのギリシヤ語は、*μάρτυς*(マルトユス)であり、英語ですと殉教者を示す言葉 martyr になっています。ですから、主ご自身は父なる神を証しされることによって、命を失うという危険をもって証言しておられたのです。そして事実、十字架で死なれました。同じようにして、イエス・キリストの証しをする者は、その証しのゆえに、命を落とすこともあるという覚悟をもって証しをするのだ、ということです。私たちはいつも思わなければいけないのは、証しは聖霊の業によるものなのだということです。道徳的にイエス様のように優しくなろうとか、そういうものではなく、聖霊の力によって本当にイエス様のようなことになるということです。

そして、「死者の中から最初によみがえられた方」とあります。主は死なれて、甦られました。この「最初に」という訳は語弊があります。これは順番だけを示した言葉ではありません。「第一に甦られた方」と訳してもよいものです。「全てのものの代表として、第一人者として甦られた」と良いでしょう。私たちが証ししているのは、イエス・キリストの甦りとそこから始まる、再創造なのです。「1

コリント 15:20 しかし、今やキリストは、眠った者の初穂として死者の中からよみがえられました。」そして、「15:23-26 しかし、おののおにその順番があります。まず初穂であるキリスト、次にキリストの再臨のときキリストに属している者です。それから終わりが来ます。そのとき、キリストはあらゆる支配と、あらゆる権威、権力を滅ぼし、国を父なる神にお渡しになります。キリストの支配は、すべての敵をその足の下に置くまで、と定められているからです。最後の敵である死も滅ぼされます。」

そして主が甦られたということは、この方が人の子、ダビデの子のみならず、神ご自身の御子であることを公に現わしたことでした。「ローマ 1:4 聖い御霊によれば、死者の中からの復活により、大能によって公に神の御子として示された方、私たちの主イエス・キリストです。」詩篇第二篇には、国々を支配するメシヤが神の御子であることが預言されています。「7-9 節わたしは主の定めについて語ろう。主はわたしに言われた。『あなたは、わたしの子。きょう、わたしがあなたを生んだ。わたしに求めよ。わたしは国々をあなたへのゆずりとして与え、地をその果て果てまで、あなたの所有として与える。あなたは鉄の杖で彼らを打ち碎き、焼き物の器のように粉々にする。』」ですから、大祭司カヤパが、「マルコ 15:61 あなたは、ほむべきかたの子、キリストですか？」とキリストが神の御子であることを前提に、イエス様に尋ねているのです。

そして、「地上の王たちの支配者であるイエス・キリスト」と続きます。イエス様が、「地上の王たちの支配者」と私たちはどこまで、意識しているでしょうか？メシヤがそのような方であることを、異邦人の支配の中で苦しんでいたユダヤ人は、固く信じていました。そして、ローマ帝国下、皇帝が救い主であり主であり、そして神の子であるとされていたのですが、その中でイエスこそが救い主であり主であり、神の御子であると信じていたのがキリスト者です。彼らにとっては、自分たちの信仰を潰しかねない地上の王たちの圧迫の中で、イエスこそが地上の王たちの支配者であることを告白しました。

黙示録を読み続ければ、これら地上の王たちの動きの背後には悪魔がいることが分かります。サタンがこの世の神となっています。「マタイ 4:8-9 今度は悪魔は、イエスを非常に高い山に連れて行き、この世のすべての国々とその栄華を見せて、言った。『もしひれ伏して私を拝むなら、これを全部あなたに差し上げましょう。』」しかしイエス様は拒まれました。十字架の道を進まれます。そしてご自分の血でこの世界を贖われます。その代価を支払ってくださり、死者の中から甦られました。そしてご自分のものとなって世界を実際に贖うために再び戻って来られるのです。

そして最後に、「恵みと平安が、あなたがたにあるように。」とありますね。これらの三位一体の神の働きやご性質があって、私たちは神の恵みの中にいることができます。言い換えると、恵みによって三位一体の神との交わりを守られているということです。恵みがあれば、平安があります。恵みではなく行ないによる救いであれば、平安はありません。祭司アロンの祝福は、三位一体の神による恵みと平安の守りの祝福でありました。「民数 6:24-26 主があなたを祝福し、あなたを守

られますように。主が御顔をあなたに照らし、あなたを恵まれますように。主が御顔をあなたに向け、あなたに平安を与えられますように。」

2A イエス・キリストの御業 5b-6

このように、十字架によってこの世を贖われますが、その時にご自分の国をご自分の聖徒たちに受け継がせることをなさいます。そこで次は、イエス・キリストが私たちに対してどのような愛を示してくださったかを教えています。

5b イエス・キリストは私たちを愛して、その血によって私たちを罪から解放し、6 また、私たちを王国とし、ご自分の父である神のために祭司としてくださった方である。キリストに栄光と力が、とこしえにあるように。アーメン。

1B 十字架の愛 5b

「イエス・キリストは私たちを愛して」とあります。ここから全てが始まります。「神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。(ヨハネ 3:16)」1ヨハネ 4:10 私たちが神を愛したのではなく、神が私たちを愛し、私たちの罪のために、なだめの供え物としての御子を遣わされました。ここに愛があるのです。」「神が愛であることは分かっている」ではないのです。全てはここから始まり、イエスが私たちを愛しておられるという真理を受け入れることによって、他のあらゆる神への献身、証し、奉仕が決まってきます。

そして愛しておられるという動機をもって、「その血によって私たちを罪から解放し」となります。主が私たちを愛して、血を流してくださいました。友のために命を捨てる程大きな愛はない、と主は弟子たちに言われましたが、それを行なわれました。そして血を流すことこそが、罪からの解放をもたらします。黙示録には、聖徒たちが血を流されたキリストによって、自分たちが罪から洗われ、引き離され、解放されて、神のものとなったことを歌っています。「5:9-10 あなたは、ほふられて、その血により、あらゆる部族、国語、民族、国民の中から、神のために人々を贖い、私たちの神のために、この人々を王国とし、祭司とされました。彼らは地上を治めるのです。」これから見ていく黙示録の話は、悔い改めずに罪を積み上げていく者たちに対する神の裁きが整えられて行くのと同時に、キリストの血によってその罪の縄目から解放され、神のものとされている姿を描いていきます。

2B 祭司の王国 6

そして、「また、私たちを王国とし、ご自分の父である神のために祭司としてくださった方である。」と言っています。ここの「王国」は「王」とも訳せる言葉です。キリストは再臨されて、神の国を立てるだけではありません。ご自分の国を立てて、それからご自分のものとなっている者たちに、この御国を受け継がせるのです。人々を贖い、その人々を罪から解放し、それから祭司として王として、御国を受け継がせるのです。ペテロが、その召命についてこう言いました。「1ペテロ 2:9 しかし、

あなたがたは、選ばれた種族、王である祭司、聖なる国民、神の所有とされた民です。」

主は、アダムを造られて、アダムが神のものとされることによって、被造物が支配されるようにされました。アダムが神の前に出て、神に仕えることによって、アダムの支配によって神の国が広がるようにしていたのです。つまり、これはある意味で「祭司の王国」と言えるでしょう。アダムが神の前に出て、そして彼が被造物の前に来て神の祝福を広げます。それによって被造物は神の支配を受けるといふことで、そこは王国なのです。ところが彼が罪を犯しました。しかしキリストが、その罪を贖う方として来られます。主はアブラハムを立てて、アブラハムの子孫イスラエルに祭司の王国となることを宣言されました。「あなたがたはわたしにとって祭司の王国、聖なる国民となる。(出エジプト 19:6)」しかし今、キリストを受け入れる者たちはユダヤ人だけでなく、多くの異邦人にも及び、それで教会に対しても、祭司の王国、聖なる国民と主が呼ばれているのです。私たちが神の近づくことが務めであり、そしてその祝福をもって人々の前に現れる務めを持っています。

キリストの御国においては、キリストが王の王であられ、キリストに結ばれた者たちがキリストと共に統べ治めるように召されています。(ローマ 8:17)。イエス様が弟子たちに語られた多くのことは、御国においていかに多くのものを任されるか、例えばタラントの喩えがそうでしたが、この地を共に支配することが語られています。そして、黙示録において七つの教会に対する約束、勝利する者に、御国を受け継ぐ約束が数多く書かれています。「2:26 勝利を得る者、また最後までわたしのわざを守る者には、諸国の民を支配する権威を与えよう。」20 章には、キリストと共に千年間、統べ治めるとあります。

そして、「キリストに栄光と力とが、とこしえにあるように。アーメン。」とあります。私たちが祭司の王国となるのは、すべてキリストご自身への栄光となるからです。ところで、こうした言葉を頌栄と呼びますが、黙示録には、主の栄光をただ宣言して、ほめたたえる頌栄が数多くあります。「5:12 彼らは大声で言った。「ほふられた小羊は、力と、富と、知恵と、勢いと、誉れと、栄光と、賛美を受けるにふさわしい方です。」黙示録から、礼拝賛美の歌を作ることはとてつもない祝福となります。

3A 主の再臨 7-8

そして7節と8節には、黙示録の主題であり、クライマックスとなっているキリストの再臨です。

7 見よ、彼が、雲に乗って来られる。すべての目、ことに彼を突き刺した者たちが、彼を見る。地上の諸族はみな、彼のゆえに嘆く。しかり。アーメン。8 神である主、常にいまし、昔いまし、後に来られる方、万物の支配者がこう言われる。「わたしはアルファであり、オメガである。」

1B 諸国とユダヤ人の嘆き 7

主が戻って来られます。地上にいる者たちが嘆くことが書かれていますが、ここには教会は含まれていません。教会は、共に治める者として、地上に戻って来られる主と共に現れます。「コロサイ

3:4 私たちのいのちであるキリストが現われると、そのときあなたがたも、キリストとともに、栄光のうちに現われます。」黙示録 19 章、再臨のキリストに付いていく存在が書かれていますが、これは教会です。「19:14 天にある軍勢はまっ白な、きよい麻布を着て、白い馬に乗って彼につき従った。」

けれども、キリストを拒み、受け入れない者たちがキリストの栄光の姿を見て、嘆くのです。黙示録には、迫害を与えている者に忍耐を与えるイエス様の言葉、そして慰めとして、福音を拒む者たちに対する神の正しい裁きをはっきりと描いています。「2テサロニケ 1:7-10 苦しめられているあなたがたには、私たちとともに、報いとして安息を与えてくださることは、神にとって正しいことなのです。そのことは、主イエスが、炎の中に、力ある御使いたちを従えて天から現われるときに起こります。そのとき主は、神を知らない人々や、私たちの主イエスの福音に従わない人々に報復されます。そのような人々は、主の御顔の前とその御力の栄光から退けられて、永遠の滅びの刑罰を受けるのです。その日に、主イエスは来られて、ご自分の聖徒たちによって栄光を受け、信じたすべての者の…そうです。あなたがたに対する私たちの証言は、信じられたのです。…感嘆の的となられます。」それで、主の裁きが正しく行なわれたことを確認するように、ここ 7 節に、「しかり。アーメン。」とあるのです。

「見よ、彼が、雲に乗って来られる。」であります。初めに、「見よ」と注意喚起しています。そして、キリストが、「雲に乗って来られる。」のです。イエス様がオリーブ山の上で同じことを語られました。「ルカ 21:27 そのとき、人々は、人の子が力と輝かしい栄光を帯びて雲に乗って来るのを見るのです。」(その他、マタイ 24:30)そして、この力と輝かしい栄光を帯びて雲に乗ることについては、ダニエルによって預言されていたのです。「ダニエル 7:13 私がまた、夜の幻を見ていると、見よ、人の子のような方が天の雲に乗って来られ、年を経た方のもとに進み、その前に導かれた。」ですから、イエス様がご自身がキリストであることを、このダニエルの言葉によってはっきりと大祭司カヤパの前で告白されて、それで死刑宣告を受けられました。「マタイ 26:64 あなたの言うとおりです。なお、あなたがたに言っておきますが、今からのち、人の子が、力ある方の右の座に着き、天の雲に乗って来るのを、あなたがたは見ることになります。」

元々、この雲は何を意味しているのでしょうか？どんな意味合いがあって、主は雲に乗って来られるのでしょうか？「力と輝かしい栄光を帯びて雲に乗って」とルカ 21 章 27 節にありましたが、力や輝かしい栄光と関わりがあります。ダニエル書においても、世界の帝国を表す四頭の獣を打ち滅ぼすための戻って来られるキリストが、雲に乗って来られるという文脈の中で語られています。雲が初めて出てくるのは、洪水の後、箱舟から出たノアに対して神が語られた言葉です。「わたしが地の上に雲を起こすとき、虹が雲の中に現われる。(創世 9:14)」と主は言われましたが、それはちょうど、天における神の栄光の輝きがあって、それが地上に臨むことを象徴しているかのようです。エゼキエル書 1 章において、ケルビムの上に乗っておられる方が、「その方の周りがある輝きのさまは、雨の日の雲の間にある虹のようであり、それは主の栄光のように見えた。(28 節)」とあります。そして主は、罪を犯しているエルサレムに対する裁き、それから諸国に対する裁きを行

なわれていきます。主が地上に臨まれるに際して、罪や汚れは力をもって裁かれ、それでその力と栄光が現れるのです。

そして、栄光の雲は、地上においては幕屋また神殿において現れました。「出エジプト 40:34-35 そのとき、雲は会見の天幕をおおい、主の栄光が幕屋に満ちた。モーセは会見の天幕にはいることができなかった。雲がその上にとどまり、主の栄光が幕屋に満ちていたからである。」主は、栄光の輝きをもって天から降りてこられた時に、シナイ山において黒雲がありました。そして荒野の旅においては、雲の柱としてご自身を表しておられました。そしてソロモンの神殿においては、その献堂の時に、栄光の雲が宮に満ちています。「歴代誌第二 5:14 祭司たちは、その雲にさえぎられ、そこに立って仕えることができなかった。主の栄光が神の宮に満ちたからである。」すなわち、天における主の栄光とその力がこの地上に現れるのがキリストの再臨であり、また地上においては神の容赦ない裁きが行なわれることがその意味に含まれています。

ヨハネは、見る人が、「すべての目」であることを強調しています。誰もが主イエス・キリストの裁きを免れることはできません。多くの異端やカルトが、キリストが既に来たということを話します。けれども、イエス様は初めからそのような惑わしがあることを予め、語ってくださっていました。「マタイ 24:23-27 そのとき、『そら、キリストがここにいる。』とか、『そこにいる。』とか言う者があっても、信じてはいけません。にせキリスト、にせ預言者たちが現われて、できれば選民をも惑わそうとして、大きなしるしや不思議なことをして見せます。さあ、わたしは、あなたがたに前もって話しました。だから、たとい、『そら、荒野にいらっしゃる。』と言っても、飛び出して行ってはいけません。『そら、へやにいらっしゃる。』と聞いても、信じてはいけません。人の子の来るのは、いなくが東から出て、西にひらめくように、ちょうどそのように来るのです。」

そして、「ことに彼を突き刺した者たちが、彼を見る。」と言っています。彼を突き刺した者とは、ユダヤ人たちのことです。イエス様はご自分の民のために来られたのに、その民は受け入れなかったとヨハネは福音書1章で話していますが、なぜなら、イエス様は、世界の諸族が見ることができるように戻って来られるのですが、エルサレムのオリーブ山の上に立たれるからです。「そして、こう言った。「使徒 1:11 ガリラヤの人たち。なぜ天を見上げて立っているのですか。あなたがたを離れて天に上げられたこのイエスは、天に上って行かれるのをあなたがたが見たときと同じ有様で、またおいでになります。」

これは、主がゼカリヤを通してお語りになっていたことなのです。ゼカリヤ書 12-14 章には、全ての国々がエルサレムに攻めてくること、そして主ご自身が戦われ、その姿を見て、エルサレムの住民、そしてイスラエルの全土が悲しみ嘆くことが書かれています。「12:9-10 その日、わたしは、エルサレムに攻めて来るすべての国々を捜して滅ぼそう。わたしは、ダビデの家とエルサレムの住民の上に、恵みと哀願の霊を注ぐ。彼らは、自分たちが突き刺した者、わたしを仰ぎ見、ひとり子を失って嘆くように、その者のために嘆き、初子を失って激しく泣くように、その者のために激しく泣

く。」そして、13 章 1 節に、「ダビデの家とエルサレムの住民のために、罪と汚れをきよめる一つの泉が開かれる。」とあり、彼らが御霊によって清められ、新しくされます。そして主は、オリーブ山に立たれます。「14:3-4 主が出て来られる。決戦の日に戦うように、それらの国々と戦われる。その日、主の足は、エルサレムの東に面するオリーブ山の上に立つ。オリーブ山は、その真中で二つに裂け、東西に延びる非常に大きな谷ができる。山の半分は北へ移り、他の半分は南へ移る。」

2B 万物の支配者 8

そして「8 神である主、常にいまし、昔いまし、後に来られる方、万物の支配者がこう言われる。「わたしはアルファであり、オメガである。」とあります。これはまさに、旧約聖書に何度も出てくる「神なるヤハウエ(イザヤ 42:5 等)ご自分の宣言に他なりません。そして、「わたしはアルファであり、オメガである。」の宣言の後には、「最初であり、最後である。」という言葉が付け加えられている写本もあります。アルファはギリシヤ語の最初の文字で、オメガが最後の文字なので、同じ意味です。ヤハウエなる神が、永遠に生きておられ、全ての人間の歴史の初めから終わりまで支配されている、支配者であることを宣言している箇所です。「イザヤ 44:6 イスラエルの王である主、これを贖う方、万軍の主はこう仰せられる。「わたしは初めであり、わたしは終わりである。わたしのほかに神はない。」「48:12 わたしに聞け。ヤコブよ。わたしが呼び出したイスラエルよ。わたしがそれだ。わたしは初めであり、また、終わりである。」

イエス様が天に昇られてから 60 年が経ち、さらにローマ帝国による圧迫と迫害が激しさを増している時に、主は、ご自身をこのようにして明らかにされ、確かに今の私たちにも支配者となってくださっていることを明らかにしておられます。さらにこの最後にイエス様を目撃した使徒ヨハネが老いて、まもなく世を去ろうとしているのですから、主はご自身が生きておられること、歴史を通じてヨハネの時と何ら変わりなくおられることを示しているのです。

そして黙示録では、イエスご自身が神である主と同一であることを宣言されています。1 章 17 節で、「恐れるな。わたしは、最初であり、最後であり」と言われます。そして黙示録の最後 22 章 13 節でもこう言われます。「わたしはアルファであり、オメガである。最初であり、最後である。初めであり、終わりである。」ヨハネは、イエスご自身が父なる神と一つであられ、神ご自身であることを福音書だけでなく、また手紙だけでなく、黙示録でも明らかにしているのです。